

---

# 魔法少女まどか ダンテ

サガ大好き

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女まどか ダンテ

### 【Nコード】

N3456Z

### 【作者名】

サガ大好き

### 【あらすじ】

ダンテで鬱クラッシュ！……の予定

## 第一話 プロローグ

(暗いなあ……………)

少女 鹿目まどか が、最初に抱いた印象はこれだった。

人には、夢と解っていて夢を見る時がある。

彼女は、薄々と直感で気付いてはいた。

ああ、これは、この光景は 夢なのだと。

だからこそ出て来た物は、この呑気な感想だったと、そんな第一印象を抱くと同時に、世界に光が戻った。

「何なの……………これ……………」

続いて抱いた感想は 終末。

生活観の一切無い倒壊した家屋。

破壊された街灯、薙ぎ倒された街路樹。

それらが全て 宙に浮いているのだ。

そして嫌でも目に入る

「アハハハハハハハハ！！ ハハハハハハハハ！！」

未だ破壊を続ける、車輪を下半身に携えた女性。

否、その表現は正しく無いのかも知れない。

青と白のツートンカラーのドレスから時折覗かせる顔からは確かに女性だと断言出来る。

但し、それは逆さになった異様な巨体からだ。

宙に浮いた状態で濁った七色の光を放つ彼女は、まどかには”悪魔”にも見えた。

暫く破壊を続けていた彼女だったが、やがて”何か”が雲の切れ間を割り裂いて現れると、その破壊行為を止めた。まるでそれが、主に敬意を払う臣下の様に見えて。自然、まどかは身構えた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そして現れた存在は                    少なくとも少女には                    神に見えた。

黒い雲の様な物が邪魔して、シルエットだけしか見えはしない。だがしかし、暗闇から覗かせる三つの光                    恐らく瞳だろう

から漏れる赤い光が嫌でも目に付く。

圧倒的な破壊を続ける魔女と、それを従えているであろう神。まどかはこれが夢だという事も忘れて、膝を折って涙を流した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・そんな」

だが、だがしかし。

そんな絶望を感じさせる光景に一直線に向かっていく影があった。まどかはそれに気が付いて目を凝らしてみた。

最初は風によつて飛んだ何かかと思つた。次は猫か何かだと思つた。

だが違つた。

それは大口径の黒い拳銃を手に持っていた。

それは、拳銃を魔女に向けて放っていた。

それは、神の放つた赤い槍に吹き飛ばされて血を吐いていた。

それは、その存在は                    人間だった。

「あ、ああああ・・・・・・・・・・」

見慣れない光景に思わず絶句する。

仕方が無いではないか。

見慣れぬ黒いセーラー服を着た少女がビルに縫い付けられている光景など、平和に暮らして来た彼女が見た事がある筈も無いのだからそんな陰惨な具合にも関わらず、彼女は動いた。

腹に、肩に、左腕に自分を縫いつけた槍を動かそうと右腕を頼りに力任せに抜く。

「だ、駄目だよ！ それ以上動いちゃ！」

無論、彼女 鹿目まどかは、それを見て見ぬ振りをする方では無く。

彼女は走りつつ大声を上げて、それを止めようとした。

しかし、眼前の少女は未だ消えぬ闘志を瞳に湛え、目の前の二体を睨みつけた。

するとそれに応えるかの様に、神が赤い光を三つの瞳の前に集め始めた。

宙に浮く赤い光を見て、地を蹴る力を強めるまどか。

あれを見て 直感できたのだ。

あれをもう一度受ければ、彼女の命は無くなってしまっただろうと。

あれだけは、少女に受けさせてはいけないと。

思い虚しく、光は槍となって完成してしまふ。

対してまどかは未だ少女に50mは離れた地を蹴っている。

間に合う筈も無く、槍が発射された。

槍は、銃弾を越える速度で少女へと向かい、その命を刈り取ろうとしていた。

まどかには、その光景がやけに鮮明に見えた。

見たくななど無いのに。

助けたいと言うのに。

と、突如としてこちらを見て微笑んだ

気がした。

こんな時だというのに 余計に死なせたくないと思った。

余計に助けたくなってしまうた。

それでも 現実には非情だった。

もう槍は、目と鼻の先まで迫ってきていた。

間に合わないのが、嫌だった。悔しかった。

だから、せめてもの抵抗として

「駄目ええええ!!!」

左手を伸ばした。

そうすれば少女に届く気がして。

そうすれば少女を救える気がして。

解っている。

只の現実逃避に過ぎない事は。

誰でも良い。

何でも良い。

神でも仏でも奇跡でも魔法でも。

何でも良いから彼女を助けて欲しかった。

自分の身を犠牲にしても良いとさえ思った。

そして槍が激突する寸前、まどかは目をきつく瞑った。

目の前の死を見たくないから。

命が落ちる音を、少しでも逃したくて。

しかし

ガキーン!

聞こえてきたのは、歪な金属音だった。

妙だな、と思いつつ目を開けてみる。

すると、赤いコートを着た銀髪の男が、少女を庇うように立っていた。

片手で持つ大剣からは蒸気が上がっており、槍を斬ったのは彼である事が解った。

「お痛のしすぎだぜ？ ミスター神様」

半ば呆然としながらまどかが男を眺めていると、そんな軽口が飛んで来た。

彼は剣を肩に背負うと、懐から白の拳銃を取り出した。

こちらも少女に負けず劣らず 否、それ以上に 大口  
径だった。

そして続けて白の銃口を二体に向け暫くそっしている、ふと気になる事があった。

「JACK」

「ふえ？」

少女が見た夢は其処で終った。

目を数度瞬きし、腰を上げて前を見る。

ピンクのカーテンの隙間から漏れる光が、未だ眠さの残る目には辛く。

目を逸らすと、視界の端に今まで抱いていたうさぎのぬいぐるみが映った。

ぬいぐるみを抱き。力を強く、込める。

「夢才子？」

ピンクのそれから返ってくる暖かな感触だけが、今が現実である事を実感させてくれた。

「おはよう、パパ」

「おはよう、まどか」

部屋を出て、ベランダの家庭菜園のトマトの剪定をする父に挨拶をする。

ベランダ越しに返事が返される。

「ママは？」

「タツヤが行ってる、起こしてやって」

「はい」

もう何度目になるかも分らぬ何時ものやり取り。

彼女の母、鹿目洵子。

母を起こすのは自分の役目だ。

何時の頃か忘れたが、何時の間にかこうなっていた。

だが、こういった日課が彼女は嫌いでは無かった。

「まー、朝！ あーさー、起きて〜」

薄い桃色の水玉模様の布団を、小さな手が叩く。

小さく音がし、幾度かそれを繰り返す。

木製のベッドに跨った少年は、茶色のつぶらな瞳を嬉しそうに閉じた。

「おーきーてー」

布団を叩く。

返事が無い。

叩く。 反応無し。

幾度かそれを繰り返し、とうとう万策尽きたかと思った時。扉が開いた。

其処には先程の少女、鹿目まどかの姿。

しかしもう寝惚け眼は彼女には無く、其処に居たのはまるで戦闘に臨む闘士の様な錯覚さえ受けた。

彼女は勢い良くベッドに近付き布団を剥ぎ取った。

「起きろー！」

「うぎゃああああ！！！！ 灰になるううううう！！！！！！！！」

其処に居たのは吸血鬼……では無く。

パールのパジャマをだらしなく着崩し、そのパジャマと同じ位に紫の髪をボサボサに乱す彼女は

「ママ起きたね」

そう、この彼女こそが、鹿目家の大黒柱であり、まどかの日課の一つの原因そのもの。

鹿目絢子その人であった。

「どっちが良いかな？」

一通りの身支度を整えたまどかは、居間で食事を続ける家族に質問を投げかけた。

キッチン越しに父の、子供用の椅子に座った弟の、ブラックのコーヒーを啜る母の。

一同の視線が、まどかに注がれる。

その両の掌には、それぞれ女性の髪を束ねる為のリボンが握られていた。

右手には桃の、左手には紫の。

「そっち」

対して答えたのは、母である鹿目絢子であった。

そのグレーのスーツで包んだ右手で指すのは、まどかの左手だった。

「少し派手過ぎない？」

自分で聞いておいて何だが、これは自分には派手だと感じていた。

「ソレが良いんだよ、これならまどかの隠れファンもメロメロだよ」  
「居ないよそんなの」

「居ると思うんだよ、その方がきつと楽しいよ」

が、母がそれを笑いながら否定する。

母のこういう前向きな性格がまどかにとっては羨ましかった。  
そして言われた通りに、リボンを身に付け、席に付く。

今朝のメニューは焼いたトーストに、目玉焼きにサラダだ。

「頂きます」

両の手を合わせ、食前の儀を済ませる。

先ずは目玉焼きをフォークで口に運ぶ。上手かった。

塩コショウが利いた良い刺激を、舌に齎してくれる。

続いてパンを、サラダをと、それぞれ食事を進めていく。

(そういえば……………)

暫くそうしていると、ふと気になる事があった。

(あの人……………)

脳裏に浮かぶはあの男。

夢の内容すら覆えていないというのに。

何故か今でもはっきりと思い出せる真紅のコート。  
そして

(何て言おうとしてたんだろう?)

途中で切れたあの台詞。

ジャックランタン、ジャックザリッパー。

もしかしたらあの中にジャックと言う名前の者が居ただけかも知れない。

幾つもの可能性が浮かんでは消える。

「まどか？」

自分を呼ぶ声。

それに反応し、現実に引き戻されるまどか。

「どうしたんだいボツとして、熱でもあるのかい？」

視線を向けると、父が、キッチンから自分の顔を覗き込むように身を乗り出していた。

父は心優しい性格であり、こういう機微には聡い。

「もう、心配すぎだよ。パパ」

「そうかい？ それなら良いんだが・・・」

心配をかけてはいけないと、笑顔を浮かべ否定の意を伝える。

未だ納得のいかないような表情の父に申し訳なく思い、

(きつと、何でも無い事だったんだよね・・・)

あれは夢だったのだと思うことにした。

その疑問に答えられる者は誰も居なかった。

あれから家を出て、鹿目まどかはアスファルトの歩道を一步一步踏みしめる様に走っていた。

階段を降り、坂道を下り抜け、暫く走ると 二つの影。

「よっ、まどか!」

「おはようございます、まどかさん」

自身と同じく、チェックのスカートとクリーム色のブレザーに身を包んだ少女達。

志筑仁美と美樹さやか。

自身の親友であり、二人共に、学友でもある。

「おっ、リボン変えた?」

「えへへ、解る?」

「普段より少し派手に見えますわ」

美樹さやかが自身の変化に気づき、仁美がそれに追従する。

普段共に居る時間が多いだけあって、この二人が気付くのに特に違和感は無かった。

「さては……イメチェンしてもてようってハラだな?」

どこの名探偵宜しく、美樹さやかが顎に手を当て考え込む仕草を

見せる。

「そんなけしからん子は、アタシが嫁に貰ってやる。」

「や、やめてよー」

「あらあら、うふふ」

そしてさやかが顎から手を離すと、何やら怪しい仕草を見せまどかに襲い掛かる。

まどかは背後から抱きつかれた姿勢となり、威勢は弱いが拒否の意を示した。

だが、本気にしている訳では無く。

これが冗談である事も解かっている。

さやかは、こつという性格なのだ。

冗談が好きで、持ち前の明るい性格で和ませるのが得意な少女である。

極稀に行き過ぎる事もあるが、ソレさえなければ付き合いのし易い、快活な少女である。

そんな二人を見て、仁美が口に手を当てて。上品に笑う。

これも日常の風景の一つ。まどかは、この光景が、この日常が、嫌いでは無かった。

代わり映えしないという事は、平和であるという事である。

彼女はそれ以上の変化を望まない。

日常の破壊を望まない。が。

だが、しかし。

平和、日常。

こつといったものは、突如として壊れる物である。

不慮の事故で。

誰かの悪意で。

或いは 予期せぬ事態で。

まるで、運命の糸に引き寄せられていくかの様に、”彼”はゆっくり

りと三人に近付いて行った。

「Excuse me? (ちょっといいかい?) お嬢ちゃん」

「あ、はい、何か御用ですか?」

仁美が答え、彼に言葉を促す。

反射的に、まどかも”彼”の方を向いた。

その瞬間、まどかは目を見開いて驚く。

彼に、逢った事など無い。

彼と、話した事など無い。

それでも、それでも、まどかは覚えていたのだ。

脱色をした様な、美しい銀の髪を。

その服とは対照的な蒼の双眸を。

彼の全身を血で彩るかの様な真っ赤なレザーパンツを、ジャケットを、真紅のコートを。

「まどか?」

「.....」

異常を感じ取ったのか、さやかがまどかの顔を覗き込む。  
それでも、まどかの返事は無く。

「まどか! どうしたんだよ」

今度は、語気を強く。

それでも返事は無く。

「まどかさん、どうかなさったんですの?」

仁美の声で、漸く我に返った。

視線を動かす、しかし男の姿は無く。

「あれ、さっきの人は？」

「ああ、道を聞いたかっただけみたいですね。もう行ってしまいましたわ」

仁美が視線で指し示す。

其処には、ギターケースを抱えた男の背が見えた。

「何、まどか。ああいう人が好みなんだ？」

ニヤニヤしながら、さやかがまどかをからかう。

それすらも、彼女の耳には入らず。

何か取り返しの付かない事になる気がして。  
右手を伸ばして

「待って！……待って下さい！」

静止を掛けた

「………？」

男が真紅のコートをはためかせ振り向く。

風に揺れるコートすらも、まどかには懐かしい感じがした。  
そして、話しかけるが。

「あ、あの……！」

「何だい、お嬢ちゃん？」

「あ……いや、あの。」

困った。

何と聞けば良いのが、彼女には解からないのだ。  
夢の中で逢った事は無いか？

黒い長髪の少女と知り合いか？

駄目だ、混乱した頭では碌な考えが浮かばない。

しかし、不意に。

不意に一つの考えが浮かんできた。

これは、これならば。

「あの、どこかで逢った事ありませんか？」

何だかナンパの様に思える台詞だった。行った2秒後、後悔した。

「H A H A、新車のナンパかい？ だったらもう少し新しいのをオススメするぜ？」

「そうだぜまどか、こういう時は食パンを啜えてだな！」

「どうかしまして、まどかさん？」

案の定。

一斉に言葉が投げつけられた。

自分でもアレは無いなどは、まあ思う。

それでも、しどろもどろになりつつも、言葉を繋げる。

「あ、いや、だから。その〜」

「逢った事があるか、だったよな？」

「あ、はい」

「いいや、残念だが無いな。」

「そう………ですか」

男がリードしてくれ、何とか会話が成立する。

男の返答に、ガクリと肩を落とすまどか。

「だよねえ。アタシもこんな良い男、一度見たら忘れるはず無いし。」  
「そうだな、俺もお話が弾む相手とは友達以上の付き合いをする様にしてるんでな」

お、話がわかるねえと締め括り。

其処からさやかと男の軽妙な会話が始まった。

曰く、ギターケースは仕事道具だ、だの。

この辺りには何をしに来たのか、など。

その会話を横で聞いている間、まどかは考えていた。

このまま彼と別れていいのかを。

それで、最後に。

最後にこれだけは聞きたく思い、口を開いた。

「あの！」

「ん？」

「名前を、聞いても良いですか？」

その問いに、又も不思議そうな顔をする男。

しかし直ぐに悪戯っぽく笑うと。

「ダンテさ、縁があれば又逢おうぜ」

不思議なお嬢ちゃん、と言い残し。

ダンテは右手を振りつつ、その場を後にした。

これが、二人の出会い。

神を否定する存在である男。

神になるかも知れない少女。

二人の邂逅がなにを意味するのかは

悪魔が知っていた。

## 第一話 プロローグ（後書き）

アニメ見てて鬱になった……きつかった。  
で、それが書いた原因です。

次は、ダンテ視点でやりたい。  
とりあえず何で日本に居んのか

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3456z/>

---

魔法少女まどか ダンテ

2011年12月11日21時50分発行